
奉神鬼～F a r E a s t N e t w o r k～

武雷 庵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奉神鬼（Far East Network）

【Nコード】

N9312C

【作者名】

武雷 庵

【あらすじ】

チエ・ヨシノン

崔英聖はNGO「Far East Network」の登録術士。風を操る力を駆使して、種々雑多な心霊怪奇事件を仲間と共に解決していく。そのたびに、何かしらトラブルに巻き込まれながら…。今回は、退院したばかりの体で城址公園の怪事を調査することに。果たして何が待ち受けるのか？

鬼の目に花吹雪・1（前書き）

初めまして。恥ずかしながら投稿を始めさせて頂きました。拙い文です。何とぞご寛容のほどを。

鬼の目に花吹雪・1

うららかな春の日和チエヨンソンだった。陽光に目を細めながら、崔英聖は都営地下鉄の駅から月島の通りへと歩み出た。

散髪したての短い髪を吹きすぎる風が優しく暖かい。自分の着ている黒のジャケットが、ひどく季節外れに感じられる。

二週間ほどの入院生活の間に、外の季節はずいぶん進んでしまったようだ。

シャツの襟元のボタンを外し、比較的車の少ない昼下がりの空気を深呼吸すると、思い出したように左の脇腹がしくりと痛んだ。

「…あ痛て…」

しかめた顔が苦笑いになる。

「…二十代も半分過ぎると、怪我の治りが遅いよなあ…」

キャンバス地のショルダーバッグを右肩に掛け替えると、英聖はちようど青になった交差点の信号を渡った。

しばらく歩くと周囲の町並みが、近代的なビルから徐々に古ぼけたコンクリートや、背の低い木造モルタルの建物に変わってきた。

再開発の波は、昔の船着場の周辺だけを僅かながら洗い残しているのだ。

潮の香が混じった河口の匂いをかきながら、英聖は慣れた足取りで目的地に到着した。

『菓子パン・ジュース』

『岸田食料品店』

見上げると、赤が退色して薄汚れたピンクに変わった看板が、昭和30年代そのままの雰囲気振りまいている駄菓子屋の2階の窓の下に、相変わらず少し傾いてはりついている。

側面に回れば、隣がすっぱりと家一件分の空き地になっているせいで、2階の外壁に作られたドアと、そこから地上までをかつて繋いでいた非常階段の痕跡を見ることができた。

昔は地上から2階への出入りを可能にしていたのだろうが、階段の無くなった今は、もはや何の用もなさないドアだ。

使うことがあるのは、ごく限られた者たちであり、崔英聖は、その一人だった。

表の引き戸をからからと開けて薄暗い店内に入ると、ガラスの蓋がついた平たい木製のケースの中に、整列したニッキ玉飴や鈴カステラ、きな粉棒などの昔懐かしい駄菓子が、そこだけ明るく色とりどりに客を迎えてくれる。

「ごめんください」

小腹が空いた塾帰りの子供のような調子で声を掛けつつ、袋菓子の並ぶ棚を横目に歩けば、店の奥行きはいくらもない。

ほんの数歩で、畳の部屋への上がり口にしつらえた旧式なレジスタ―の前に着く。

長身の英聖が見下ろすと、陰で背を丸めて居眠りしていたらしい、小柄な老女と目が合った。

「岸田のばあちゃん、お久しぶり」

慌てて丸眼鏡を直す様がおかしくて、英聖の顔から思わず笑みがこぼれる。

「だれ？」

「おれおれ」

「…あたしにゃ、そんな名前の孫は居ないよ」

「ひ孫は？」

「術者登録、取り消しといてあげるから、好きなだけ入院しといで」

「相変わらずきついなあ、岸田今日子さん」

女優のような名前だが、彼女の本名だ。

フルネームで呼ぶと何故か機嫌が良くなる。

「あんたも相変わらず元気だねえヨンちゃん。ビルの10階から落ちたって聞いたけど？」

「4階だってば。話が大きくなってる」

「4階だって、たいしたもんじゃないの。さすがは風技士だねえ」

「風使いが落ちちゃいけないんだけどね。入院までしちゃって格好悪いっतरらないよ」

「まあ、猿も木から落ちるっていうし。人生何が起こるか分かんないから面白いのよ」

娘のような声でころころと笑う岸田商店のオーナーに、英聖は苦笑しながら光沢のある一枚の白いカードを差し出した。

クリーム色のレジスター機のどこにスリットがあるのか、英聖の方からは見えないが、今日子婆さんは、受け取った白いカードを親指と人指し指に挟んで、すっと上から下へと滑らせた。

ややあって、チン！と甲高い音を立ててレジスターの銭受けの部分が飛び出す。

「はい。ちょうど月初めだから、いつものとおり三百円ね。」

英聖から百円玉三枚を徴収すると、今日子はカードを返してよこし

た。

「ああ、それから。二階の扉、気をつけなさいよ。どうも近頃、空間が不安定でねえ。

ゆっくり開けるようにね。不用意に踏み出しちゃうと、隣の空き地に落っこちるから」

「はいはい。…てか、立て付け直すように庶務へ言っとこうか？」

「前に一度伝えただけどねえ。係も忙しいのは分かるんだけど。そうね、暇があったら催促しといて頂戴。」

「了解。んじゃ、お邪魔します」

「はい、行ってらっしゃい」

見送る今日子に軽く頭を下げ、英聖は脱いだスニーカーを片手にまとめて持って、上がりかまちから奥へと進んだ。

擦り切れかけた畳を踏んで、木製の階段をきしませながら2階へ上ると、襖が外されて二間が一続きになった部屋の端に、場違いな洋式のドアがぼつんとついている。

今日子の話を思い出しながら、英聖は鈍く光る金属製のノブに触れた。

かすかな振動が伝わり、どこかでかちり、と音がした。

そのまま、ゆっくりとノブを回す。押し開いて、足元を確かめつつ一步を踏み出すと、一瞬浮遊感があって英聖はぎくりとしたが、すぐに固く滑らかな床の感触が足の裏をしっかりと支えた。

「よかった。ちゃんとつながってるよ」

後ろ手にドアを閉めると、ノブの感覚は消え、広い空間にこだまする静かなざわめきが聞こえ始めて、視界が開けた。

古い石造りの、飾り気の無いホールには、いくつかの革張りの長椅子が並び、その向こうに銀行の窓口のようなカウンターが見える。

『新規登録』『資格申請』の看板を通り過ぎ、『業務相談』の窓口へ向かうと、書類の処理をしていた受付嬢が顔を上げた。

「あら：ヨンソン君いつ退院したの？」

「ども。今日ですよ。あっこさん、ご迷惑かけました」

「そんな事ないわ。じゃ、今日は労災の申請ね？」

「え、出るんですか？」

「条件ぎりぎりだけど、何とかなりそうよ」

「助かった：ありがたいです」

「じゃ、これが書類ね。月末までにお願い」

「はい」

「あ、それから：早速で悪いけど、ひとつ仕事が入ってるわ」

登録術師の紹介や、もろもろの事務を引き受けている受付嬢さくらい 桜井晶子あきこは、プリントアウトされたシートの入ったファイルを1枚、カウンターに出してきた。

「場所は、城址公園の端なんだけど」

「城址公園：いつも花見でにぎわうところですよね」

「ええ。桜はまだでも、今は梅が満開みたいね。それが、この前の地震で石垣の一部が崩れたのよ」

晶子の話はこうだった。

区の職員が、崩壊した部分を見に行ったところ、人が一人くぐれるほどの穴が開いていた。

かなり奥が深そうなので、ひとまず立ち入り禁止にして専門家の調査を待つことにした。

ところが、次の日から当の職員をはじめ、物珍しきで穴へ近寄った者はおろか、散歩の途中に偶然そばを通りかかった人たちまでが、次々に体調不良を訴えて、原因も分からないまま寝込んでいるのだという。

「祟りっぽいけど…何の祟りですかね？社を壊したわけでもなし、墓石を倒したわけでも…」

「御神木を切ったりした訳でもないわ。石垣に出来た穴が影響を及ぼしているのは

間違いなさそうだけど…」

「調査は、俺一人ですか？」

「おいおい、初動の調査は常に二人以上で、てのが原則だったらい？」

しわがれた声に振り向くと、昔話から抜け出してきたような和装と頭巾を身に付けた白いあごひげの老人が、肩に小さな生き物を乗せて立っていた。

「あれ、茂吉じっちゃん。久し振り。クダも元気か？」

「こないだ入院したと思ったら、もう治っちゃったのか？若いってなあ良いねえ。」

クダと呼ばれた、滑らかな毛並みの細長い獣が、英聖の腕に飛び移って遊んでいる間に、齊藤茂吉は資料を受け取って目を通した。

「被害者の情報が、もちっと欲しいな。現場に出向く前に病院に寄るか。」

「了解。症状とか見てからのほうが、持っていく装備品選び易いもん

な。」

「察しが良いじゃねえか。じゃ、ちよっくら行って来るよ、晶子ちゃん。」

手が空いたら、2番倉庫の鍵の準備しといてくんな。」

「あ、お二人とも待って。引受人の欄にサインしてからにして下さいな。」

職務に忠実なコーディネーター晶子が手渡した書類に、二人は手早く署名した。

鬼の目に花吹雪・2

「みんな回復し始めてて良かったなあ。もっと酷い状態かと思ってたけど、ちゃんと話も出来たし。」

「最初に倒れた区役所の人は、もうすぐ職場復帰するつってたしな。ふーん…思ったほど性質たちの悪いもんじゃないかも知れねえが…」

被害者達を見舞ってから、病院の地下にある「開かずのトイレ」を通ってNGO本部へ戻ってきた英聖ヨシノブと斉藤老人は、調査の為に装備を整えるべく、呪符や呪具の類が収められている、2番倉庫の内部をあれこれ物色していた。

床から天井まで届く書類棚には、様々な効果を発揮する呪符の詰まった分厚いファイルが、種別に整理されて隙間無く並んでいる。老人は、「穢気浄化」の呪符を数枚抜き取り、小型のクリアファイルへ移した。

「じっちゃん、被害者は瘴気にあてられたって見てる？」

「十中八九、間違いねえだろうな。お前さんが来てくれて大助かりだ。」

「いや、確かに俺は風使いだけど、吹き飛ばせるかは量にもよるし。」

「いざって時にや、この札で助太刀してやるよ。折角いいタイミングで退院したんだ、ひとつ頑張ってくんな。」

「初動の調査じゃなかったっけな…」

齊藤老人は、どうやら自分に瘴氣払いをさせる気満々らしい。

ぽんと肩を叩かれた英聖は、一抹の不安を感じつつも、防瘴マスクを取り出しに

倉庫の奥へと向かった。

一見すると只の医療用マスクだが、鼻と口が当たる内側には呪符が貼れるようになっていた。

物理的な手段で防げない、瘴氣のような靈障を緩和するものだ。

万能ではないが、あるのとないのでは大きく違う。

「あんまり強くない瘴氣かあ…瘴氣の元になってる奴も、あんまり手強くないといいよなあ…」

「よし、札はこんなところだろ。そろそろ行くぜ、ヨン様？」

「じいちゃん、その呼び方やめてくれよ」

すたすた歩き出す齊藤の後を追って、苦笑しつつ倉庫を後にする英聖。

その胸から、先程感じた不安は消えていた。

「まあ、今日は天気も良いし…」

空気が澄んでいて動かし易く、春の日和に照らされて陽の気に満ちている。

少々の邪氣ならば吹き散らせるだろう。

英聖はもともと樂觀的に考える方だった。

電車を降りて、歩いて現場に到着してみると、考えを改めざるを得ない光景が広がっていた。

「……うわ」

「…こりゃ、多いの」

質はともかく、公園中を覆い尽くすほどの量の瘴気が、黒々と渦を巻いている。

これは本腰を入れて大風を呼び込まなければ、散らすことが出来ないだろう。

もう何日か自宅で、のんびり休んでから復帰すれば良かった、と英聖は悔いたが、電気水道ガス家賃の支払いは、そうそう長いこと待ってはくれない。

「…ま、やってやれない事はない、かな…」

少々歩いて、公園を見下ろす高台へと移動する。

眼下に広がる瘴気の雲は、もちろん普通の人々には見えない。

しかし、今は公園全体が立ち入り禁止となっているはずだ。

遠慮なく力を使うことが出来るだろう。

英聖は、ゆっくりと呼吸を整え始めた。

鳥が翼を開くように、両手が自然に左右へと広がる。

大地を見つめ、空を見上げる。

蒼天へと意識を溶け込ませていく。

「…無理はするなよ」

斉藤老人の小さな呟きは、さわり、と動き始めた空気の流れにかき消された。

英聖の口からは祈りの言葉がこぼれ、紡がれてゆく。

「…天下大將軍、地下女將軍…氣脈龍穴より御力添え給う、雲一つ無き春天の美空より、魔氣邪氣祓い退ける陽風の輝き降ろし給え…」

足元の青草がなびき、木々の枝がしなる。

斉藤は頭巾を押さえた。

「起来！浄化巨風！（ソンプアクパラム）」

どうっと空が鳴った。

足を踏ん張っていないと倒れそうなほどの風量が、眼下の公園へと疾駆する。

圧倒的な力を持っていながらも、爽快な温かさを伴う春の青嵐。まさに陽の気の塊と言えた。

「こりゃすげえ…」

みるみる吹き散らされていく瘴気の雲を見ながら、斉藤老人が感嘆の声をあげた時。

「……………っつ！」

声にならない苦鳴を漏らした英聖が、体を二つに折った。

手で脇腹を押さえている。

「おい、大丈夫か?!」

「…平気…痛いだけ、だから…」

斉藤は、懷に常備している札を一枚手にとって英聖へとかざした。

「手え退ける。直接じゃねえと良く効かん」

言われたとおりに手を離れた英聖の脇腹に符を当て、剣指を立てて呪を呟く。

英聖の表情が目に見えて和らいだ。

狐に似た小動物―クダが斉藤の肩から飛び移り、英聖の頬を舐めては心配そうに覗き込んでくる。

「有難うクダ…、もう大丈夫だ。じっちゃん、感謝」

滑らかな毛並みを撫でながら、飼い主に礼を言う。

身を起こすと、公園の瘴気があらかた吹き飛んでいるのが見えた。

「おお、やったじゃん、俺」

誇らしげに胸を張るのも束の間、件の石垣の穴から、じわりと黒い靄が染み出す様子が目に入る。

二人は、思わず顔を見合わせた。

斉藤が尋ねる。

「どうする？ 出直すか？」

「いや、このまま行こうぜ。また同じ事の繰り返しになっちまうし」

城址へと丘を下りて行く英聖の足取りに迷いは無かった。自信を深めたのだろう。

「…確かに、瘴気自体はあんまり性質の悪いもんじゃないからな…」

後に続きながら、斉藤老人は空を見上げた。

吹き散らした陰の気の影響か、澄んだ青さの中に、灰色の雲がぽつり、ぽつりと浮かんでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9312c/>

奉神鬼～Far East Network～

2010年11月18日14時28分発行